

## 図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力

新学習指導要領の改訂の基本的な考え方に「思考力・判断力・表現力等の育成の重視」が示される。ただ、思考力・判断力・表現力が何であるのかは明記されていない。茨城大学教育学部教授金子一夫氏の提言<sup>1)</sup>を参照して、思考力・判断力・表現力を次のように捉える。これは図画工作・美術科だけではなく全教科を通して該当するのではないと思われる。

表1 思考力・判断力・表現力の概念

思考力	概念、像、形成要素などを操作して、それらの構成可能性を探る力。
判断力	構成された概念、像、形成要素などの候補群から、適切なものを選択する力。このとき、選択の基準が明確な項目や命題の場合と、無意図的あるいは直観的な場合がある。
表現力	意識内の概念や像を様々な方法によって他者にも捉えられる形にする力。場面により、言語による言語的表現と像による非言語的表現、あるいは客観表現と美的表現に区別される。

さて、図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力を考えるにあたっては、まず美術の本質から検討されるべきであろう。美術は感情をも組織化する視覚的イメージの構成創出である<sup>2)</sup>。美術は単なる表出ではなく、感性も含めた知性による意図的な構成である。偶然性が重要な役割を演じる作品でもそうである。美術は知の一形態であり、美術作品は視覚的イメージを現出させる様々な方法論の結集体である。つまり、図画工作・美術科の授業において児童生徒は、視覚的感情像の意識、すなわち視覚的な美的体験をすることとなる。そして教材とされる美術作品は、表現主題を核に、表現内容・表現形式・表現方法が、それぞれ絡み合っている美術知の総合体である。このことを踏まえて、学習指導要領に示される図画工作・美術科の二領域である表現と鑑賞について、それぞれの思考力・判断力・表現力を以下のように示す。

表2 図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力

	表 現	鑑 賞
思考力	概念、像、造形要素を操作して、表現主題・表現内容・表現形式・表現方法等の構成可能性を探る力。	対象作品に関して表現主題・表現内容・表現形式・表現方法等の観点による解釈可能性を探る力。
判断力	可能性のある表現主題・表現内容・表現形式・表現方法等から適切なものを選択する力。	対象作品に関して適切な観点と解釈を選択する力。
表現力	表現主題から像を創造する力。	対象作品に関して感想・解釈・批評を口述あるいは記述する力。

このような力は、一授業で獲得されるものではなく、継続的・計画的な教育によって獲得されていくものである。まず各学校段階を貫く基軸があり、次に各教科、各学年、各単元、各授業等において、どのようにするのか検討されるべきであろう。本学校園で実施されている図画工作・美術科の実践において思考力・判断力・表現力の育成がより効果的に進められているところである。

(共同研究者：島根大学教育学部芸術表現教育講座 有田 洋子)

1) 平成22年当時、茨城大学教育学部附属中学校校長であった金子一夫氏の指導の下、同校の同年度第2回公開授業研究会における「本校の研究全体基調」が示されている。

2) 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』（中央公論美術出版、平成15年）36,37頁。